

エンジンジョイ 勝利より継続

高校サッカー考

100回目
キックオフ

下



「高校選手権の優勝が優先位の1位ではない」

興国(大阪)の監督、内野智章(42)は明言する。監督に就いて15年で全国選手権出場は2019年度の1回だけ。今年も府予選は準々決勝で敗れたが、4選手がJ1川崎などから内定を得た。これでプロの世界に送り出す選手は27人になる。

「卒業してもサッカーに携わってほしい。プロ選手でなくても、指導者や草サッカーでもいい。それが未来のサッカー界の発展につながる」

強い信念の下、練習は技術習得に重点を置く。体力強化やセットプレーに時間は割かない。瞬時の判断力を養うために、本をべらべらめくりながら読む「速読」というユニークな練習も採り入れる。

そんな内野も勝利の味に取っつかれかけた体験がある

203年度 学校法人興国学園 興国高等学校
本プロサッカーリーグ 国内定考 合同記



興国高校の内野監督

2年前に出場した全国選手権は初戦の2回戦で敗れたが、移動中に声をかけられ、取材依頼が増えて一気に注目を浴びた。

高校サッカーの影響力を目の当たりにすることもに、それが指導者を勝利に執着させる怖さを感じた。「自分も出場後の数カ月間は『次も出るためにはどうすればいいか、どうしたら勝

Jクラブから内定を得た興国高校サッカー部の4人

「クラブから内定を得た興国高校サッカー部の4人。『次も出るためにはどうすればいいか、どうしたら勝

興国では公式戦を終えた約80人の3年のうち50人がいまも練習に出てサッカーを楽しんでいる。

全国選手権に出場する48校以外の高校では、次の第101回をめざす活動がすでに始まっている。

12月19日、東京都西部の第8地区新人選手権準々決勝。ハーフタイムでベンチに戻った国分寺の選手たちが作戦ボードを囲んだ。マ

「ク」の受け渡しなどの意見を出し合う。選手だけの即席ミーティングは、顧問で

コーチの伊藤圭倫(45)が「そろそろいいか」と声をかけるまで続いた。

自然発生したやり取りを、主将の若林春希(16)は「普段からよくあること」と言った。後半に決勝点を奪い、年明けの準決勝に進

んだ。春に新生者が加われば、例年通りの130人程度の大所帯になる。3年前の選手権予選(東京A)で都立校で唯一4強入り。進学校のため部員の多くがサッカーも勉強もここでやりたい

と国分寺をめざして。 「もともと学習能力や集中力を持っていて、子供が多い。ここさらに主体性を求める必要もない」と監督の元木明(62)は言う。私立との格差は大きい、工夫して解決しようという発想を指導者も選手も持つ。他の部活動も盛んで校庭を広く使える時間は短い。効率を追求した練習はテンポが速く、集中度も高い。

と国分寺をめざして。 「もともと学習能力や集中力を持っていて、子供が多い。ここさらに主体性を求める必要もない」と監督の元木明(62)は言う。私立との格差は大きい、工夫して解決しようという発想を指導者も選手も持つ。他の部活動も盛んで校庭を広く使える時間は短い。効率を追求した練習はテンポが速く、集中度も高い。

保護者会を組織し、部活動に巻き込んで一緒に楽しむ雰囲気も作ってきた。選手の部費とは別に、保護者の年会費は4万円。最近、コロナで残った会費で校庭にLED照明3基を設置した。週1回程度派遣されるトレーナーの日当などにも充てられる。

45チームに分かれて活動するため、全員のモチベーションを保つことに気を配る。週末には、監督の元木が早朝から各チームを回り、選手たちに声をかける。「大変だが楽しい。我々のやり方で選手を伸ばし、目標の(選手権予選準決勝以上の)西が丘サッカー場をめざしたい」

元木と伊藤の自慢は、部員の7割以上が卒業後も様々な形でサッカーを続けていることだ。 敬称略

(この連載は照屋健、潮智史、辻隆徳が担当しました)



新人選手権のハーフタイム、国分寺高のベンチでは選手だけによるミーティングが自然に始まった。指導者の指示を待つのではなく、後半に向けて意見を出し合う